

狂気／非狂気、循環性、植民地主義 ドリス・レ ッシング『地獄への下降報告』の並行空間

著者	中井 理香
雑誌名	文学研究論集
号	16
ページ	1-14
発行年	1999-03-08
その他のタイトル	Sanity/Insanity, Circulation, Colonialism : The Parallel Spaces of Doris Lessing's Briefing for a Descent into Hell
URL	http://hdl.handle.net/2241/14058

狂気／非狂気、循環性、植民地主義

—— ドリス・レスリング『地獄への下降報告』の並行空間 ——

中 井 理 香

人々は狂人の自由意志の行使をさまたげていた鎖を解く。
だがその結果として、この意志を医師の方の意思のなかへ
移しかえ遠ざけることによって、それを狂人からうばって
いる。
ミシェル・フーコー¹⁾

§ 1 精神支配のフィクション

狂気の問題は、常に個人の人格、あるいは社会疎外程度の問題で終わってしまっていて、狂気のもつ政治的社会的問題提示として本格的に取り組んでいるフィクションは少ない。そんな中、精神病院という閉鎖社会において精神病医師による患者の精神／意識支配の構造に取り組んで、帝国主義的理性支配の仕組みに迫ったフィクションがある。それはドリス・レスリングの『地獄への下降報告』(*Briefing for a Descent into Hell*, 1971)である。このフィクションの特質は、狂気における精神の単一性、思考と行動の一貫性が、正気の世界すなわち非狂気空間における論理とは異なる秩序を形成している状況を記憶喪失の患者が＜報告＞し、それによって、逆に非狂気空間における無秩序な精神支配のパラドックスを露呈させることにある。

第二次世界大戦後、帝国が崩壊していくイギリス社会でそれまでの価値観や倫理観に反抗する文学運動が活発化し、その推進者＜怒れる若者たち＞に数えられる何人かの小説家によって狂気に関する問題提示が試みられた。しかしその後、デイヴィッド・ストーリーの『ラドクリフ』(*Radcliffe*, 1963)にしても、ジェイムズ・G・バラードの『クラッシュ』(*Crash*, 1973)にしても、狂気を個人の破滅の手段として語るに過ぎず、歴史的記述としてのフィクションとしてはもの足りない。

1950年代から1960年代の初めにかけて、世界的に帝国と植民地の関係が一挙に消滅していった。そのような世界の趨勢に対して、イギリスもまた1960年代から70年代に帝国主義的支配者の権威は衰退していった。同じ時期に、精神医療界の治療法である電気ショック療法 (electroconvulsive therapy) も衰退していく。電気ショ

ック療法は1930年代に出現し、その残酷な治療は当初から問題になってはいたものの、1940年代から50年代に医師と患者との関係に支配／被支配の関係を確立させていた。しかし、1960年代に入ると反精神医療運動が起り、電気ショック療法に対する強い批判がなされる。その批判は、医師と患者の関係における前者の強烈的な精神支配、意識支配の現前、すなわち人間性の不在に対して起こったものである。その支配は明らかに知的権力の暴力を露呈した。

この医師と患者の関係は、かつての帝国と植民地の間の支配／被支配の関係を重ね合わせてとらえ直すことができる。なぜなら、支配とは帝国が政治・経済・文化などの知的領域の面で一方的に植民地をその統率下に置き、知的権力の装置の暴力性によって推進されてきたからである。この知的権力の装置が、帝国主義崩壊後のイギリス社会でも国家間の関係ではなく、個人と個人の間に、あるいは社会と個人の間に置き換えられ、その一つとして電気ショック療法の絡んだ精神医学における帝国主義的理性支配が現前する。

そのことに気づいた作家が現れたのは、必然的な時代の方角であったと考えられる。そして、古典主義時代における医師の行為についてのフォーコーの指摘²⁾を待つまでもなく、精神異常者と精神病院、狂気と非狂気との関係に鋭いメスを入れた作家がドリス・レッシング (Doris Lessing) である。彼女は、狂気の問題を『暮れる前の夏』(*The Summer Before the Dark*, 1973) や『生存者の回想』(*Memoirs of a Survivor*, 1974) などでも扱っているが、むしろそれらに先行したフィクション『地獄への下降報告』で最も鮮やかに狂気／非狂気の表象に関わる問題の具現化に成功している。

そこで本稿では、植民地主義時代における支配／被支配の構図が、1970年前後においても知的権力の装置という形で依然としてイギリス社会に内包され、個人と個人、社会と個人のレベルに還元されている構図を、このテキストの分析を通して明らかにする。それによって、狂気あるいは精神異常者、非狂気すなわち精神病院それぞれの記述がパラレルになる特徴を引き出し、後者が人間の精神あるいは意識そのものを支配しようとする知的権力のおそるべき狡猾さをあらわにしながら、狂気を強圧的に自己解体させるプロセスと、同時に非狂気による精神支配の不在の仕組みを解明する。

§ 2 構造的戦略としての〈報告〉

このテキストでは、一貫して二つの空間——狂気空間と非狂気空間（非正気空間と正気空間と言い換えることもできる）——が並存している。この特殊な構造が支配関係を分断する重要な装置となっている。このテキストの中心的人物として登

場する患者（以後＜患者＞と表記する）とチャールズ・ワトキンスは、肉体的には同一であっても、意識的存在としては全く別個であり、相互に完璧な他者である。医師 Y はその＜患者＞をジェイソンと記録するが、それは＜患者＞の狂気空間における航海中の船員の名前である。しかし、それは決して＜患者＞にとって自分の固有名詞ではない。彼は時にはシンドバッド (Sin bad) を名乗り、時にはオデュッセウス、時にはクラフティ (Crafty) になる。狂気空間では命名それ自体に何の意味もない。

もう一つこのテキストで構造的に重要なことは、舞台が中央新兵病院の精神病棟内の一室に限定されていて、時は1969年8月15日から1970年初めに設定されているものの、フィクション全体を通しての語り手が存在しないということである。つまり、すべてが病院内での動きであり、語りとしては、独白と対話と記録と書簡で成り立っていて、小説的叙述が一切ない。ウィリアム・サムソンの『肉体』(*The Body*, 1949) が、狂気に至る主人公ビショップの一人称回想形式の語りで通されるのに対して、レッシングのこのフィクションでは、そのような形で小説全体としてのプロットが語られることはない。

とはいいながら、＜患者＞の独白は、このフィクションの大部分を占めている。しかもこの独白は＜患者＞の旅の物語であり、これにほんの少しばかりの＜患者＞と他の患者との対話を加えた音声言語が狂気空間を構成する。これに対峙するのが、医者との所見の記録とワトキンス周辺の人々の書簡という文字言語で構成される非狂気空間である。この狂気／非狂気という二つの空間の間には、見かけの接触、つまり＜患者＞と医師や見舞客との接触の手段として対話があるものの、それは意識の交流には至らない。狂気空間の論理と非狂気空間の論理は完全に分離し、その乖離の行き先は、電気ショックという暴力、政治的権力による一方的管理である。

レッシングの『黄金のノートブック』(*The Golden Notebook*, 1962) や『四つの門のある都市』(*The Four-Gated City*, 1969) の語りを含む狂気の領域を探索したフィクションの語りと大きな違いを見せるのは、この作品がすべて報告 (briefing) という形式をとっている点である。タイトルとして、「リポート」ではなく「ブリーフィング」という軍隊用語を使った意味は、戦争の論理を前景化させる戦略的意図にある。さらに「ブリーフィング」は、狂気空間の報告と非狂気空間の報告、音声言語と文字言語の間の断絶を逆説的に示すことになり、このテキストにメタフィクション的特質を与える。

狂気空間の報告は、このテキストのほとんど大部分を占め、＜患者＞の旅の報告として一貫性をもっている。しかしこの＜患者＞は無名であって、この報告が何のための戦略であるかは、そう簡単には見えてこない。そのことがこのメタフィクシ

ョンの最も重要な戦略である。非狂気空間から観察するときには幻想／空想に見える旅であっても、＜患者＞にとっては現実そのものであり、その思考は一貫して理路整然と展開する。狂気空間における思考の一貫性が、非狂気空間の雑多性、不統一性、局部性を逆照射する戦略的意味をもって来る。

これに対して、非狂気空間の報告は、明白な戦略目的をもった中央新兵病院の医師 X、Y の所見の記録と彼らによって収集されたワトキンス氏周辺の人々からの書簡で構成されている。それらの大部分はこのテキストの後半のかなりの部分を占め、全てが文字言語によっている。それら文字言語の戦略目的は、記憶喪失からの意識回復という精神医学的治療にある。

だが、M. ロウをはじめとするこのテキストに関する多くの評論³⁾は、この旅を、無名の＜患者＞のものとしてではなく、既婚の古典教授ワトキンスの＜内部世界の虚構＞(inner-space fiction)としてとらえている。と同時に、スーフィズムとの関連で内部世界の構造を解き明かそうと試み、さらにその旅を＜心の旅＞の物語として精神病理学的な分析の対象にしている。こうした評論家たちは、皮肉にもいつの間にか精神病棟の医者になり替わって患者ワトキンスの意識構造を分析理解しようとしている。それはまさに医師 X に象徴されるもの、すなわち中央新兵病院の＜正気＞のエピステーメである。しかし、内部世界とは非狂気空間から狂気を覗くことではなく、狂気そのものの意識空間のことである。

§ 3 上昇と＜下降＞の循環性

＜患者＞の独白は、旅の現実体験の形式と回想の形式を錯綜させながら、非狂気世界の常識と医療行為を、狂気空間からパロディ化する。一般的に現実体験は現在形で語られ、回想は過去形で語られる。だが、このテキストでは現実体験が回想へ、その回想が現実体験へと転換することによって、時間の観念が時間の直線性を超越する表現形式になっている。狂気空間では時間の流れは不在であって、あるのはタイミングだけである。タイミングとは、無時間的な永遠の領域における非連続的瞬間のことであり、時間と空間の交差点である。それは非狂気空間が時間から解放されないことに対するアイロニカルなメタファーである。

この旅は三部で構成され、海と陸と空の旅から成っていて、いずれの旅も統一体(unity)を求めながら、目的を果たすことができず、旅の循環性を神話化している。最初の旅は海の旅で、風を求め、塩の海を航海し、結局すべては光に還元される。大西洋上を時計と逆回りに潮流に乗ってグルグル航海し続ける。そこでは上昇も下降もなく、平面上を月の満ち欠けのリズムに従って循環するだけである。その空しい反復は、オデュッセウスやシンドバットの航海の反復として、＜患者＞の語る音

声言語による神話化の証しとなる。

つまり、循環性を示しているこのテキストでは、上昇と下降は、同義語となる。これらの神話化された語りは、非狂気空間では眠りとなり、何も語らないことに等しく、狂気空間では目覚め／思考が展開し、その中で上昇と下降が相対化される。それは、フーコーのいう「人間学的な眠り」にも等しい。

このような眠りから思考を目覚めさせるためには——その眠りはいかにも深く、思考は不寝番として逆説的にそれを味わっているのだが、それほどまでに思考は、それ自身のうちに固有の支点を見いだすため二分化しつつある独断論の円環性を、根源的に哲学的である思考の敏捷さ及び不安と取り違えているわけだ——⁴⁾

非狂気からみる狂気の眠りは、哲学的な眠りにも等しいかもしれないが、しかし狂気空間では一貫した思考形式が存在する。その語りは狂気空間の内部では、理路整然と展開し首尾一貫して宇宙構造における循環性を雄弁に語り続けている。海・陸・空の視点、さらに太陽系宇宙の構造的視点から自己を客体として語る。語る主体でありながら、語られる客体でもある。＜患者＞にとって、夢は現実であり、睡眠は覚醒である。現在形と過去形が入り交じり、接続語を相対化させる文法もそれに呼応している。＜患者＞は、医者 Y に対してこう語る。

Words come out of your mouth and fall on the floor. Words in exchange for? Is that it? Your dreams or your life. But it is not *or*, that is the point. It is *and*. Everything is. Your dreams *and* your life. You can talk there, talk. I dream whatever I do, lying or waking.⁵⁾

床に落ちた言葉は、幻想＝畏にかかって再び上昇し、狂気の論理としての透明な宇宙原理の法則に従って現実的時間を越え、特定の地球空間を脱して、永遠に循環するクリスタルの透明な時空間のなかでシニファンの機能を充足し、神話化されるのである。そして＜患者＞の旅の語りの終着は、上昇／下降の相対化された言葉そのものに立ち帰る。

さて、ここでこのテキストのもう一つの語りである文字言語による語りについてみてみよう。このフィクションの後半では、患者の前身であるワトキンス教授と関係のある人物の書簡で構成されている。それらのすべては医師の采配で集められたものである。その最初のものは、医師 Y のもとに届けられたワトキンス教授の妻

フェリシティの手紙であるが、その中に同封されたローズマリー・ベインズの手紙がそれに続く。この手紙は、手紙というには異常な長さで、十数ページに及び、それ自体が短編小説的な物語となっている。ワトキンズはケンブリッジ大学の古典学の教授で、彼の教育論の講義の聴講生であった元教師で未亡人のローズマリーが、その講義に抵抗を感じ、躁鬱病に悩む考古学者フレデリックとの出逢いの顛末を語っている。この手紙の内容と〈患者〉の旅との間に、興味深い関連性がある。例えばフレデリックの躁鬱病は、次のような思考に起因する。

That ‘Greece was the mother of western civilization and Rome its daddy’ directed archaeology and excavation for a long time – yet he, Frederick, would be able to make out a case that the Arabs, Moors and Saracens were parents to ‘western’ civilization, sources of its ideas, its literature, its science, a case based on the same kind of evidence that made us legitimate heirs to Greece and Rome.... (p. 167)

このようなオリエントを中心にして西洋合理主義を分極化する思考は、サイードの『オリエンタリズム』と類似しており⁶⁾、〈患者〉がクリスタル＝天上界から鳥瞰した「小さなイングランド」(p. 99)の社会では重力によって中心に向かって引き込まれ、抑圧され、そのために彼の精神が肉体から分離されてしまうのも、そのような思考による。フレデリックにおける〈オリエンタリズム〉は考古学学会との確執を生じ、彼は自己崩壊に至った。そしてローズマリーはフレデリックの共鳴者で、子供を「大人とは異なった人種」(p. 150)と決めつけて知的支配によってコントロールしようとするワトキンズの教育観を批判する。ワトキンズの記憶喪失はこのローズマリーとフレデリックのもとで生起することになるが、これも別のローズマリーの手紙で報告される。さらにワトキンズの戦友マイルズ・ブーヴィやフィリップ・ブレント＝ハムステッドの手紙が加わる。これらはワトキンズのイギリス流の伝統的な思想に対する革新的な思想との葛藤から来る抑圧の存在を医者が収集して、〈患者〉の精神障害の証明に供しようとするものであって、ワトキンズの個人的な年代記を形成する資料であり、それは理性帝国主義の表象に他ならない。加えて、ワトキンズの妻やワトキンズの学生で愛人となったコンスタンス・メインなど、彼が愛した女性たちの手紙もまた、年代記を補筆するものである。

このような文字言語で語られる表象は、非狂気社会の知の戦略によって狂気主体の抹殺を策略する「ブリーフィング」である。しかし、〈患者〉＝ワトキンズという関係を狂気／非狂気、音声言語／文字言語の関係で眺め直せば、二つの空間が分

断され分節化されて、＜患者＞≠ワトキンズという図式が見えてきて、二つの空間のそれぞれの主体は相互に他者でしかない。にもかかわらず、非狂気社会の戦士たちによる治療行為は、狂気空間を下降社会、すなわち地獄としてステレオタイプ化する策略しかもたず、他になす術がない。

§ 4 相対化する＜地獄＞

そこで地獄とは何か。ダンテの『神曲』を引き合いにだすまでもなく、天国→煉獄→地獄という上下構造は、キリスト教文化の宇宙構造の基盤であることはいうまでもない。例えばジャネット・キングは、ワトキンズの記憶喪失を「地獄への下降」と認識することを前提としてこのテキストを解析していく。

The ‘descent into hell’ of the novel’s title appears to refer to the mental condition of the patient, Charles Watkins, when admitted to hospital with amnesia, but it gradually emerges that the hell in question is in fact the ‘real’ world.⁷⁾

もちろんその前提は、現実すなわち非狂気空間こそ＜地獄＞であるという結論を導くためのものであり、その帰結については筆者も異論はない。しかし、彼女の論理には錯誤が潜んでいる。それは彼女は＜患者＞の旅を、ワトキンズの夢として心理的にも制度的にも「抑圧の進行」と見なしたことである⁸⁾。これは精神病理学的領域に留まって解釈したために、＜患者＞の意識を狂気に閉じこめてしまい、結果的に自己分裂を証明する域を越えてはいない。＜患者＞とワトキンズが完全に分断されているからこそ、＜患者＞の眠り／目覚めにおける意識は自由そのものなのである。

ところで、キリスト教における地獄は、常に天国と対比され、特に旧約聖書におけるその概念は、死者という「忘失の国」⁹⁾として存在し、眠り・忘却・沈黙・暗黒を表象する。その限りでは、＜患者＞の眠りは地獄となる。しかし、その眠りを強要するのは医師たちであり、医師たちこそ＜患者＞を地獄に落そうと努力することになる。精神病院は、「患者にピルを食べ物のように与えて眠らせる」(p.130)機関なのである。だが、その医師たちの強制はこの＜患者＞には通用しない。なぜなら＜患者＞にとって医師たちとは完全に他者の関係にあるからであり、＜患者＞は眠り／医療的支配を拒否し続ける意識を貫くからである。狂気空間では狂気の論理が働き、非狂気空間の秩序とは全く異質の秩序が存在する。にもかかわらず、狂気空間における＜患者＞の現実、非狂気空間の科学主義には空想としてしか映らず、精神医学者の R. D. レインが指摘するように「空想は他者によってただ推論さ

れるに過ぎない」¹⁰⁾ことを決定づける。

一方、新約聖書における地獄の概念は、劫罰の火によって悪しき者が苦渋を受ける場所であって、混沌、苦渋、醜悪、汚濁、淫欲、陰湿、罪と罰、無秩序など宗教的倫理的に前景化してネガティヴに表象される。その限りでは、非狂気空間について、このテキストではあまり地獄の様相は語られていない。むしろ、〈患者〉の旅の体験の中で陸の様相は地獄的展開を繰り返す。男子の赤ん坊の血塗れになった巨大な性器が曝された古代都市の光景、特にやがてそこで繰り返される犬鼠の戦争は、地獄そのものである。生命の誕生と死、さらに「緋色の女性器」(p. 85) に向かう放縱な淫欲には、エレミア記のベンヒンノムの谷まで逆行して血生臭い阿鼻叫喚¹¹⁾を見る思いがする。〈患者〉は、この陸の旅の中ではユダを演じている。陸の旅の前の航海中に、天国をイメージさせるクリスタルに連れ去られた十二人の仲間から〈患者〉だけが取り残されて筏で漂流し、その結果として醜悪な戦争に巻き込まれる。〈患者〉は明らかに劫罰の苦渋を強いられている。ここでは十二人の使徒と裏切り者のユダの物語は、戯画化されて、倫理、宗教の不在を表象する。

このことは、〈患者〉の旅の終末の部分のユーゴスラヴィア戦争物語でも現れる。この旅は落下傘降下で始まり、山岳を昇り、洞窟に籠もり、女性パルチザン、コンスタンティーナと恋し合い、その恋人の死で終わる。ここでも下降と上昇を繰り返す。十二人の仲間とともに闘い、自分は助かる。恋人は出産しかかっていた雌鹿に襲われて殺される。これは、地球／人間社会の現在の現実の醜悪さを体験する点で、犬鼠戦争体験と同質であって、ただ、ユーゴスラヴィア戦争物語のほうは、社会主義体制を理念化するコンテキストの中で、〈地獄〉を再現したもの過ぎない。

名乗りの問題についてであるが、〈患者〉が医師に自分の名をシンドバッドと名乗り、その名をすゞバッド・シン (Bad sin) と言い換えたり、クラフティ (悪賢い奴) と名乗り変えたりすることを、医師は「悪らつな罪」(bad sin) と解釈し、過去の犯罪を意味づけようとする (p. 19)。狂気空間における劫罰の苦渋は、非狂気空間において犯罪者に転化されたことになり、医療行為を正当化するための罫にはかならない。だが〈患者〉にとってそれは狂気空間における〈現実〉の戯れ (それは非狂気空間からみれば〈幻想〉) にすぎない。それをラカン流に解釈すれば、その罫は〈幻想〉ということになる。

先に触れたように、狂気空間には非狂気空間のような秩序や制約や合理性は存在しない。ある意味では時間も超越し、神話的現実が存在する。そこは時間が流れるのではなく、タイミングのみが遍在する空間である。そこでは地球の歴史、人類の歴史が現前のものとなり、宇宙空間の法則さえヴィジュアルに展開する。この段階

で、＜患者＞の海・陸・空の旅は脱宗教・脱政治化され、その経験は循環し、相対的な三層構造を形成する。その構造はダンテの『神曲』における三層構造に類似してはいるが、そのコンテクストの枠の中では、＜患者＞＝私＝自己は、非狂気空間に生きる人間を「捕らわれ人」と認識し、狂気空間で旅をすることは「罫、牢屋から出る」(p.199)ことを意味し、狂気空間における自律性を獲得する。このことは、皮肉にもワトキンズの聴講生ローズマリーが彼に宛てた書簡で報告されている。フェルマンによって指摘されていること¹²⁾だが、ラカンはこの「罫」を幻想／無意識の世界とし、そこから抜け出ることの不可能を説いている。しかし、このテクストではその関係は完全に逆転している。つまり催眠状態における狂気空間は、月の運行によるリズムにこそ影響されているが、それは意識の起伏であって、自由を束縛するものではなく、月の運行のリズムが男女を問わず生理的な快楽となって意識の滑らかな展開を促進している。それはいわば人類の最も自然で最も進化した社会あるいは世界のあるべき姿の表象であって、宇宙原理に基づく未来への希望の予兆を光に変え、ヴィジュアル化しているのである。その結果、狂気空間の思考／精神性は純化され、単一化されて、一貫性を与えられたクリスタルの空間における現実および意識の内部世界 (inner space) を獲得する。にもかかわらず、このような狂気空間の陶酔的な生命つまり思考の進行は、非狂気空間からみればあくまで幻想すなわち無意識の世界に過ぎず、両者は互いに完全に隔絶されたままであり、狂気に対する非狂気の意識支配は続く。

このように分断された非狂気と狂気の二つの領域の間で支配／被支配の関係がそもそも成り立ち得るのだろうか。病院あるいは医師と＜患者＞の関係は、常に知的権力を有する側が一方的にしかも暴力的に支配するという形しかありえない。なぜなら、狂気の領域では、無意識や幻想の中で生命力を維持するにとどまり、外界への意志の働きは存在しないからである。つまり支配の決め手は知的権力を有するかどうかにかかっており、その行使に当たっては、分断された壁を強引に越えようとするために暴力的にならざるを得ない。もしこの状況を国家間あるいは民族間の関係でとらえるとすれば、ホミ・バーバによる西洋文化の植民地支配に関する見解がよく符合する。彼は次のように述べている。

It is there, in the colonial margin, that the culture of the west reveals its *différance*, its limit-text, as its practice of authority displays an ambivalence that is one of the most significant discursive and psychical strategies of discriminatory power — whether racist or sexist, peripheral or metropolitan.¹³⁾

西洋文化の差延が権威を行使して植民地を支配する時、戦略としてのアンビヴァレンスがあらわになる。このテキストでも、医学的差延が精神病院／支配者の権威を絶対化し、そのスタッフと共謀して患者／被支配者を精神／意識の周辺に押し出す。そして＜患者＞の記憶喪失状態を＜地獄＞と決めつけ、医学的戦略として覚醒状態を回復するという名目を掲げ、催眠状態における陶酔的生命力／思考の進行を強制的に排除しようとしている。その結果、狂気における生命力を抹殺することによって正気を回復させようとする、つまり＜生死の共存＞というアンビヴァレンスを生み出す。それは医学という学的権威の支離滅裂な暴力以外の何ものでもなく、精神病院におけるヴィクトリア朝の精神支配という暴力と同様にステレオタイプ化している。ヴィクトリア朝の時代には狂人を牢獄に閉じこめ、両足を鎖で繋ぎ、拷問によって意識回復を図ろうとして、しばしば死に至らしめたといわれる。そこでも精神支配の暴力がステレオタイプ化していた。

このようなアンビヴァレンスを、R. ルービンスタインは、西洋の伝統は精神分裂症的であると主張するジョン・ヴァーノンの考えを援用しながらも、狂気／正気を相対化して明らかにしている。

The intrinsic dualism of logical thought shapes perception at such a basic level that not only are the patterns discerned in experience split into opposing categories (real/unreal, sane/insane, and so on), but these splits in turn create the further dichotomies in the perception of separation between the self and the world. Accordingly, the politicization of madness leads to the logical paradoxes of either the sanity of insanity, in the form of a retreat into a privately meaningful but ultimately solipsistic awareness, or the insanity of sanity, in the form of capitulation to the division endemic in contemporary life. Both are “schizophrenic,” for “each mode of being, the real and the fantastic, the sane and the insane, excludes the other, and each is intolerable because of that exclusion.”¹⁴⁾

確かに西洋社会の合理的思考が破綻したとき、基盤的な二元論が相互に一つのコンテキストを失って、＜精神分裂症的＞な傾向を見せ始める。ここで着目しなければならないのは、＜the politicization of madness＞が＜狂気における正気＞あるいは＜正気における狂気＞という論理的パラドックスに陥るという指摘である。

§ 5 並行する狂気／非狂気

このテキストでは、狂気空間と非狂気空間を完全に分離し、並存させる。だが、これら二つの空間は、メービウスの輪のような表裏の関係ではあっても、決して接することのない空間である。だからといって狂気空間は決して非狂気空間の下方構造ではない。どちらかが表であって、どちらかが裏であるという関係ではない。すでに繰り返し触れたように、〈患者〉とワトキンズは肉体としては同一であっても、意識構造は全く別の存在であり、全く体系の異なる基準によって生命及び意識が統率されていることが、何よりもそれを証明する。つまり、〈患者〉の意識構造は旅人の生命を支え、ワトキンズの意識構造は古典教授の生活を維持する。この二つの空間の唯一の接点は、病理学的電気ショックである。

このテキストでは、電気ショック療法の残虐性そのものが問題なのではない。そのことは、〈患者〉が何の抵抗もなく最後に電気ショックを受け入れ、ワトキンズが蘇生されるという展開が示している。病理学的には、電気ショック療法は、1933年 M. ザーケルによるインシュリン・ショック療法、1935年 E. モニスによるロボトミー療法に続く精神支配的療法として、1938年イタリアの研究者ウーゴ・ツェルレッティによって創始された。イギリスでは、ロンドン市議会の拒否にもかかわらず、電気ショック療法の機器が1940年代の初期に神経学者によって導入され、イギリス国内で広く行われるようになったとエレイン・ショーウォーターが報告している¹⁵⁾。電気ショック療法は、精神病院における医師の患者に対する強制的収監による拷問というヴィクトリア朝的精神支配に取って代わっただけのことで、特に女性患者に対する男性医師の支配的構図が増加傾向にあったとも報告されている¹⁶⁾。その残虐性に対する批判から R. D. レインや D. クーパー等が主導する反精神医学運動が起こった。ドリス・レスリングもレインに賛同し、彼の書『ひき裂かれた自己』(*The Divided Self*, 1960) や A. エスターソンとの共著『狂気と家族』(*Sanity, Madness and the Family*, 1964) などを読んで、レインとは「ほとんど近親相関に近い」¹⁷⁾ほどの影響関係だったという。そのことは、ショーウォーターも1960年代のレスリングの小説はレインの運動と並行して展開している¹⁸⁾として認めている。けれども、1970年代に入ると、反精神医学も衰退し、レインとレスリングの関係も疎遠になる。電気ショック療法はそれなりに保持され、無産筆化されて、その残虐性はかなり和らげられて現在に至っている。しかし、このテキストで問題なのは、電気ショックに至るプロセスにおける医師による患者の精神支配の構図である。レスリングが医師も患者も男性に設定したのは、電気ショックをめぐるジェンダー的問題には触れまいとして、純粹に狂気空間の意識、精神性を志向したものと考えられる。

所詮、レッシングのテキストでは、上昇と下降とが同義語であったように、＜正常＞と＜狂気＞もまた同義語である。非狂気空間からみれば、狂気は排除、抹殺されるべきものであり、理性帝国主義からみれば、狂気は地獄からの救済という名目で合理的な権威によって暴力的支配を甘受しなければならない。しかし、狂気空間そのものから見れば、狂気は宇宙の法則、特に月の運行に最も順応した最も自然な＜正常＞そのものである。むしろ汚染に満ちた無秩序で混沌とした非狂気空間こそ極め付きの異常、つまり地獄と認識されなければならない。

§ 6 精神／意識における帝国主義の崩壊

このように見てくると、このテキストに示された狂気／非狂気の並行構図は、非狂気空間から狂気空間を嘲笑するという構図を否定していることがわかる。医師が医療行為という絶対的な知的権威によってその支配力を行使し、＜狂気＞をコントロールする風景は、理性帝国主義そのものの暴力性を映し出す鏡となり、結果的にはそれ自体が地獄化する。こうしたプロセスのもつ政治的意味は、植民地における支配／被支配という文脈と重ね合わせて検討し得るだろう。

このテキストの場合、分断された狂気空間／非狂気空間の壁を無視して攻撃を仕掛ける科学主義の信念は、逆に狂気は治療し得るという考えが幻想であることに気づかず、その結果として逆に地獄への下降を辿っていくという滑稽な戦略劇となって映し出されている。しかも薬物や電気ショックなどの治療法の効果を競って議論に終始する精神支配者は、狂気とは無縁の空間に放逐されてしまう。つまり、人間の精神／意識そのものを支配する知的権力、医療行為のおそるべき狡猾さは、狂気を異人種化し、非狂気と狂気の人種の差異を前景化して、狂気の世界／意識の領域を攻撃し、分断し、他者の関係を仮構し、非狂気空間からみた狂気の主体を解体するのである。だが、それは非狂気空間から一方的に仕掛けられるのであって、狂気空間における狂気の主体は、非狂気空間において解体されて不在化する。つまり狂気の主体の一貫した意識構造は、非狂気空間では物体化し、治療対象として支配者の前に差し出されるだけである。しかも支配者たちには、患者の過去の主体、すなわち発狂以前の——正気の時の——主体の幻想（医者たちによって収集された書簡がその幻想を造形する）を追いかける。このようにして＜患者＞は、非狂気空間の精神支配者によって、非狂気空間における物体としての主体、狂気空間における生命体としての主体、非狂気空間における精神支配者たちの幻想に動めく主体という分断された多重性を担わされることになる。これが理性帝国主義の暴力がもたらす狂気主体の崩壊の姿である。

その結果として、究極的には狂気／非狂気いずれの空間においても患者の主体／

自己を破壊に導くものとなる。つまり、非狂気空間におけるエピステーメは、逆に自らの無秩序を露呈させ、狂気を他者に追いやって、狂気的身體を暴力的に支配せざるを得なくなり、その見返りとして狂気の意識支配を不可能にするというパラドックスに陥る。それに対して、狂気空間における狂気の逆襲は、言葉の神話化によって非狂気空間の秩序にっぺ返しを仕掛ける。そのために非狂気空間における狂気への戦略装置はますます科学主義的暴力になり、支離滅裂になる。

このように分断された多重性を担わなければならない狂気主体は、科学的理性帝国主義においては他者としてしか見えてこない。それは、非狂気空間の知と幻想の結合、権力と快楽の結合の結果と見てくるならば、ホミ・バーバが、植民地の言説に関して指摘した「分断した多重的信念」という次のような考え方に符合しているだろう。

It is through this notion of splitting and multiple belief that, I believe, it becomes easier to see the bind of knowledge and fantasy, power and pleasure, that informs the particular regime of visibility deployed in colonial discourse.¹⁹⁾

このテキストが表象する問題は、そのような知的権力の装置による精神／意識領域における理性帝国主義の崩壊に他ならない。狂気そのものの内部世界のフィクションは、逆説的に非狂気空間における主体の不在を正常な意識として現前化することに成功している。それは1960年代から70年代にかけてイギリスの批評界に取り込まれたアルチュセールの理論——イデオロギーは国家の装置であるという理論——に符合し、電気ショックは狂気支配の装置となる。さらにグラムシ理論が示すように本来「支配と被支配の関連性は固定されたものではなく、常に＜不安定な均衡＞という『プロセス』として現れ、再生産されなければならない」²⁰⁾にもかかわらず、そのプロセスを無視する精神医療の独善的自己破綻は、結果として至当の帰結であったのである。

【注】

- 1) ミシェル・フーコー『狂気の歴史』田村俣訳（新潮社、1975年）、p. 536.
- 2) 『狂気の歴史』、pp. 347-359.
- 3) Margaret Moan Rowe, "Parables of Inner Space: Briefing for a Descent into Hell, The Summer Before the Dark, and The Memoirs of a Survivor," *Doris Lessing* (London: Macmillan, 1994), pp.59-76, Elizabeth Maslen,

- “Explorations of Inner Space,” *Doris Lessing* (Plymouth: Northcote House, 1994), pp.27-32などが挙げられる。
- 4) ミシェル・フーコー『言葉と物——人文科学の考古学』渡辺一民、佐々木明訳（新潮社、1974年）、p. 363.
 - 5) Doris Lessing, *Briefing for a Descent into Hell* (London: Flamingo, 1995), p. 142. 以下引用はこの版により、本文中の括弧に頁数を示す。
 - 6) Edward Said, *Orientalism* (London: Routledge, 1978), p.206.
 - 7) Jeannette King, “Inner-Space Fiction: Briefing for a Descent into Hell,” *Doris Lessing* (London: Edward Arnold, 1989), p.55.
 - 8) King, p. 58.
 - 9) 『詩篇』第88篇
 - 10) R. D. レイン『自己と他者』志賀春彦、笠原嘉訳（みすず書房、1975年）、p. 16.
 - 11) 『エレミア書』第19章
 - 12) ショシャナ・フェルマン『狂気と文学的事象』土田知則訳（水声社、1993年）、p. 359.
 - 13) Homi K. Bhabha, “The Other Question: Difference, Discrimination and the Discourse of Colonialism,” Russell Ferguson et al., eds., *Out There: Marginalization and Contemporary Cultures* (New York: The New Museum of Contemporary Art, 1990), p.71.
 - 14) Roberta Rubenstein, “Briefing for a Descent into Hell,” Harold Bloom, ed., *Doris Lessing* (New York: Chelsea House Publishers, 1986), p.168.
 - 15) Elaine Showalter, *The Female Malady* (New York: Penguin Books, 1987), p. 206.
 - 16) Showalter, p. 207.
 - 17) Lesley Hazleton, “Doris Lessing on Feminism, Communism, and ‘Space Fiction,’” *New York Times Magazine*, July 25, 1982, p.27.
 - 18) Showalter, p.238.
 - 19) Bhabha, p.84.
 - 20) 毛利嘉孝「文化と過剰決定」、『現代思想』第26巻第15号（1998年12月）、p. 103.